

1938(昭和 13)年の新聞記事

1 月 28 日 東京日日新聞

友を語る

口語歌人H・K君

『善良』故に逃れられぬ貧困

【上】石原純

正直で善良で、何ごとにつけてもさほど顧みなくはふるまふことの出来ない人間は、今の世のなかで生きてゆくのにどうも不都合らしく見える。さうであるとするなら、彼の善者生存の原理に従ふと、このような環境はつまり圖々しい人間を益々繁榮させることになるわけであるから、ちよつと我々には空恐ろしい感じを深めさせる。そしてかうして人間の世のなかは一層どうなつてゆくのであらうかと私は思はないわけにゆかない。

H・K君といへば、古くから詩をつくつたり、重筆を書いたり、それから口語歌の盛んな頃には、一方の筆頭として相當に筆を利かせたものだから、かなり名も知られてゐるに違ひない。その頃の『善良』と『自由』といふ雑誌の上などで、私は定評を博した自

由形式の短歌を主張してゐたので、定評者の一人であつたH君とも時分談話をしたのはそのものであつた。しかしそれがきつかけでいつの間にか友だちつき合ひがお互の間にばまつてゐたのである。私が房州の保田に住んでゐた頃のこと、みんなで出かけて来て會合を開いたこともあつた。それから少し経つて、定評口語歌の人たちがだん／＼にいはゆる自由律に變るやうになつて、H君もその仲間になつてからは、やつと親しく交ることになつた。それ以前から同君の生計問きの言しいことも聞いてゐたので、私が東京に住むやうになつてから、保田の留守居役をお勤ひした。畑で草花でもつくつて賣つたらよからうといふことであつたが、これは身體の弱い同君には不向きであつたらしい。その後、私の都合でまた東京に引き上げてもらつたが、さうかうするうちに私たちの間で『定評歌』といふ雑誌を出すことになつたので、その雑誌を引き受けてもらつた。幸ひに郊外に同君の父親の残した家があつて、下宿人を置く部屋が十ばかりあるといふことで、大分儲けてはゐるが、ともかくそれで下宿をやれば食べてゆかれるといふので、やゝ安心した。ところが最初は不慣れな變處でもあつたし、安い部屋代でそこを借りるやうな人たちは何れも不自由な暮らしをやつてゐる邊中なので、H君の人のいゝのにつけて込んで、ろくに部屋代も拂はないといふ。H君にして見れば、自分が困るのにつけても、その人たちの生活を見ると、どうもそれを無理にも催促はできず、さうかといつて立退いてもらはうとしても容易には部屋も空けてくれないといふ。却つて電氣代などを一度に拂はせられて、これでは全くやり切れないといふのであつた。

この間にH君自身が一時重病で悩んだこともあつたし、それでもよく調ひでゆけると思つた程であつた。その後、好きな碁盤の會所でもやつたらといふので、壁面

の備付けだけはお手傳ひしたが、やはり碁盤の購置からかと思ふやうに人々が集まらぬといふ話であつた。それから町の人々の後援で町報を出すやうになつたが、その寄付金を集めるのにもいつもよいに氣をつかふので困るといふ様子であつた。或は小兒童のためパンフレットを出すといふので、その原稿もいくらかお手傳ひはしたが、それを賣るのに人を頼むと、代金が自分の手許まで届かぬうちに消えてしまふといふことであつた。

こんなわけで今でもH君のことをひどく氣の毒に思つてゐるが、さて人のいゝといふことはこれほど生活を困難にさせるのかと思ふと、どうも情無い。だが、自分の胸裏を見透すと私の好む人たちのなかには人のわるさうな人間はさほどないやうなので、H君ほどではないにしても、これらはやはり多少ともその部類に屬する人、たまたまなのであらうと思つてゐる。

友を語る

アルプスの夏と共に
忘れ得ぬ彼女

石原 純

下の

どの邊まで友だちといふのか
わからないが、先づ廣い意味の知
り合ひのなかで特殊な記憶を残し
てゐるのは一人のスイスの婦人
である。それは一九一三年の夏で
あつた。その前年にドイツに行つ
た私はミュンヘンとベルリンとで
夏と冬とを過ごしてから、スイス
のチューリッヒで春を過ごし、夏
休みに田舎郎君と一緒にアルプ
スの山のなかで遊んだ。田舎君は
以前に一處行つたことがあるとい
ふので、私を案内してくれたわけ
だが、チューリッヒからのアルプ
ス行きの鐵道の終點にリントール
といふ山村があつた。その驛から
すつと山崎りの方にたつた一軒の
離れた家があつて、夏だけ人々を
泊めるやうになつてゐる。赤瓦を
屋根にした木造のいかにも粗末な
家である。しかし大きな山麓の境

緯のある草原で囲まれてゐて、山
羊など飼つてあるし、遠方には首
に鐐をつけた牧牛があらちち歩い
てゐる。すぐ同側には氷河の鐵筋
かが白く光つたアルプスの峰々が
續いて見えて、實にすばらしい山
の光景であつた。

天井の低い、くすんだ板壁の部
屋のなかで、夜は賣い賣いの蠟燭の
燈で過ごすといつた素朴な生活で
ある。でも、夏の間だけはかなり
に賑つた。そこにはいろ／＼の國
の人が集まつてゐる。蠟の色の黄
いろいは我々二人だけだが、ど
ういふわけか主婦といつてもま
だ二十を出たばかりの年頃の女は
なか／＼歓迎してくれた。エーデ
ルワイスの花の探取と一緒に裏山
に登つたともあつたし、氷河の麓
まで行つてそこから流れてくる水
の美しい色を買したことであつ

た。毎日親しく話してゐるうち
に、彼女は自分の身上話を打明け
て她に愛戀になることさへあつ
た。また年も若いのにことに像い
で来て、その良人はまことに人の
いゝ人間だが、どうも氣が合はな
くて戀しくなるといふのである。
短い夏が過ぎて、長い冬ごりの
間忘れられたやうに暮されてゐる
この寂寂な土地のことなど思つ
て、そとに同情に堪へない念ひ
がした。

ギターを弾いて聴かされた夜な
どもあつた。こゝではこの國の
人もまるで差別はなかつた。言葉
訛は異つても、何れも同じ人間と
しての親しみ合ひなのである。た
からいかに思慕がよかつた。
鈴半響のおもしろい話を聞いた。
九月に入ると、山は急に寒くなつ
て来た。泊つてゐた人々もはつぽ
つ歸り出して日毎に寂しさが増し
て来た。もう今日はこの宿を閉ぢ
るといふ日に、われ／＼もそこを
辭し去つた。私はそれから一月許
り離れた後に、イギリスへ行くつ
もりだといふ話をしたら、主婦は
この冬に良人がロンドンに行く事
になつてゐるから、自分も一緒に
ついて行つてもう一度そこで遊び

たいといひ出した。私は半は當に
もせずに出かけたが、ともかくロ
ンドンに着いてから手紙だけは出
しておいた。

ところが二月はかりも経つてか
ら私はロンドンの下宿でひよつこ
り彼女の訪問を受けたのに驚いた。
この大都會で見ると、彼女がい
かにも田舎風で思へなかつた
が、それだけに一種實に感ぜら
れた。英語の余りよくわからない
彼女を案内して、私は公園や街々
を歩いたこともある。夏の追憶を
なつかしげに話し出すときには、
いつもしみじみとした調子になつ
た。そしてこんな大都會ではやり
自分には相應はしくないといいつ
てゐた。

翌年の春に私は日本に歸つて來
たが、その後スイスからの彼女
の便りを幾度ももらつた。だが、
それもいつかしらおぼえてしまつ
たから、今はどうしてゐるか知ら
ない。たゞそれでも私はあのアル
プスの夏の印象を心の奥から
こゝろでできずにはゐる。

(岩波書店)

[illegible]

右
原
純

[illegible]

にすることの出来ない事情である
と思はれる。この意味で一般に露
と技術者の露出に關し、資本主義
への何等かの組織的制約の行はれ
るべきことが、いかにしても露出
に望まれないではない。



石原純

いて見えて、なつて本
 意の色はわからな
 いものになる。そこ
 で、科學に客觀的な見方
 をする科學の性質は
 認められるのは正し
 くない。

「ニュートンの引力の
 人間」の歌の上でい
 うような主義が癖へ
 られるが、之等は何れ
 も、或意味に於いての拙
 劣である。ところが近
 年、科學に對する多く
 の誤解が起る。

「ニュートンの引力の
 人間」の歌の上でい
 うような主義が癖へ
 られるが、之等は何れ
 も、或意味に於いての拙
 劣である。ところが近
 年、科學に對する多く
 の誤解が起る。

[illegible]

科學動員論

研究機關の統制

石原純

科學研究に對して幾らかでも豊富な研究費を支出することの必要であるのは上述の通りである。事變後にはわが國の財政に余裕のないのは明らかであるが、しかし科學動員を國家の一つとして認める以上は、言ひくこれに處する道を斷じなくてはならない筈である。それならば具體的にいつてどれ程の研究費を適當とするかといふなら私は他國よりもよほど思ひ切つて内輪に見積つたつもりで、先づ試みに一千萬圓と答へて見よう。だが、そんなことをいへば、多分大體當局は驚をうけてしまひ、それは幾んでもないことだと應へつけるに違ひない。して見れば、科學動員が今日政府に必要を認められたといふものゝ、それがどれだけの體であるかを大いに疑はねばならないことになる。一千萬圓としたところで、それは來年度の總支出總額約八十億圓の僅に八百分の一にしか上らないのである。八百分の一や千分の一の支出が科學のために向けられないで、

ら動員するのはいけない。最も望ましいのは科學者自身が自發的に相互に協力した上で、おのづから統制が結果するといふことである。一體に統制の理想はいつもこになければならないのであるが、實に科學研究においてはその必要があると思へられる。

上に述べたドイツ學術振興會といふのは、從來の研究機關が相互に密接な連絡をとりつゝ一つの自治體を組織するといふ仕組みにされたのであつた。そして全體を代表する評議會が政府から支給委任された研究資金をそれぞれが有用な研究に消費するといふのであつた。私はこのやうな自治的組織がわが國にも甚だ望ましいと思つてゐる。

本來ドイツの學界には研究に對する協同の精神が強く存在してゐた。今日ではユダヤ派の學者の排斥を勵しく行つてゐるので、多少その有様を變へてゐる點もあるやうであるが、獨逸の學界も昔で有名な故ヘーペル博士も嘗て述べたやうに、眞に熱心な協同のために奮闘しようとする熱熱な願望に燃えてゐる點の半分がいつも學界に透つてゐたので、學界のやうな組織的聯繫こそ、この上

もないドイツの事實であると同博士がいつたのは、蓋し至言である。しかもこの事はわれ／＼にとつていかにも羨ましい次第であつたわが國の學界も早くそこに到達しなくてはならない。さうなつてさへれば、いつ科學動員が行はれても、立派にその役に立つことのできるものである。そしてこの土管がなくては、科學動員も結局は幻のやうな空中樓閣に終らねばならないであらう。

要するに科學動員を最も効果的ならしめるには、先づ豊富な科學研究費を惜しんではならないといふこと、そして同時に科學者の協力の體を擴大させるといふことが、根本的に必要であると思ふ。私はわが國の將來のためにこれが國家として強かに實現せられることを望んで止まない。(了)

知識の現状

『でも、地球は動く』

科學的知識と外部的影響

右 京 純

世のなかの状況は時代と共にいろいろに變つてくる。ひと頃は世界平和の夢が翹に高まつて、今にもそれが實現されさうに見えたこともあるが、近頃になつてみると、この國でも自分の國の安全な存在を先づ第一に考へなくてはならないやうになり、それを保持するためにどんな争ひもまた耐するわけにゆかないといふ念がひどく強まつて來た。謂はゆる背に腹は代へられぬといふわけである。世界の平和は依然として口にはされてゐるものゝ、時にはいかに名目に過ぎないといふ感を懷かせられる。それと云ふのも一時的に無理にも抑へつけられた國際的な均衡は、やがていつか自然に破られて來なくてはならないからである。

このような状況の變化に應じて社會的には學問が職に見られたり、藝術が何よりも必要とせられたり政治が殊さら強い力を發揮したり、または信託が人心を支配したりすることになる。概して學問の

最も著しいものは現代に於て政治の力が科學を左右しようとする處に見られる。

その實例は誰しも知つてゐるやうに、ソヴィエト聯邦やナチス・ドイツにあるが、何れも特定の政治理論を科學の上にまで強要し、それと相容れ得るやうな科學理論だけを許容しようとするのである。

即ちソヴィエトでは、マルクシズムの世界觀をあらゆるものの原理として認める上から、例へば遺傳學の法則を辯證法的でないとして否定しようとしたり又は實用を伴はないといふことで排斥しようとしたり、民族の差別を結論する人種學的研究は非科學的であるとしてたりする。また之に反してナチス・ドイツでは、他民族、殊にユダヤ系の學者が創設した科學理論はドイツ的のものではないから、我々ドイツ人は別にドイツ科學を確立しなければならぬと主張する。尤もそれらの國の自然科學者の全部が決してこのやうな説を肯定するのではなく、之を稱へるものは寧ろ少數であるとは思はれるが、例へば等の人々が極めて強力な政治をその背後に背負つて強硬に之を擁護するに當つては、その壓する處は決して小さくはない。少くともそれらの國々では、たとへば反對の意見をもつてゐたとして

も、公けには之を議論すること
が、許されない有様に置かれてゐる。良心のある科學者は自分が眞であると思つて科學理論を衷心に信じてゐるが、昔のガリレオ・ガリレイに倣つて、「でも、地球は動いてゐる」とひそかに囁くよりは外はないのである。

知識の現状

科學知識の特質

科學的知識人の外部的影響(三)

石原純

ないと思ふ。

私はこの小文に於て科學的知識の本質について少し説明しようとして、殆んど全段に於て正しく併し現在の時勢に於て科學を解するためには、一體はそれらの考察も必要であると思つたのである。科學的知識は客觀的普遍的なものであることは恐らく誰も認めてゐるが、なほ實際にいろ／＼な社會的事實が科學の上に影響を及ぼすといふことがなせ起つてくるかは、現代に於て改めて深く考へられねばならないのである。

上に述べた種々の影響のうちで信仰が科學を壓抑するといふことは、専ら古代的な狀態であつて、之は單に科學への無知若しくは無理解から結果してゐるのである。だからそれは論はゞ反文化的のものであつて、このやうな事情が聯かでも公けに行はれるとしたならそれはまさに文化的國家として大いに恥づべきものでなければなら

ないと思ふ。次に政治が科學を壓抑するといふことは、既に説いたやうに、國家又は社會のための一種の犧牲としていかにしても止むを得ないといふ場合があり得るわけである。併しそれにしては國家又は社會にとつて科學それ自身の進歩が重要なことといふことが絶対に缺かすことのできないものであり、殊に今後の激しい國際的競争の優勝者たらんがためには一層科學の方に頼らねばならないのは明らかであるから、さう考へればこのやうな犧牲は一種早く取り去るべきが至當なのである。だからかやうな犧牲を取てはならねばならないといふのは、つまり政治の不幸なのであつて、それに前記の如く之を現に行はしめてゐるやうな政治はいかに一時的には必要であつてもやがてまさに反省されなくてはならないものであると思ふ。

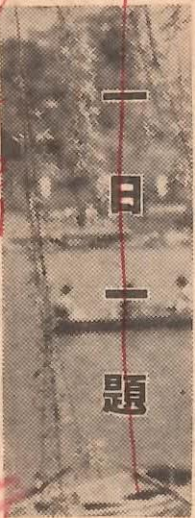
科學的知識はいかに壓迫的なものであらうとも、科學の體裁を形づくつてゆくのは我々人間であり、しかも人間の誰一人でもがそれ／＼の社會的生活を行つてゐるのであるから、科學はやはり社會的に賦與されなくてはならぬといふ議論が、實に唯物論者によつて盛んに主張せられた。併し我々から見れば、若しそのやうな社會的賦與が科學の上に現れるとするなら、それはつまり社會的條件が科學を壓抑した結果に外ならないのである。だから、たとひ現實にはその事が認められたとしても、やがて科學それ自身はそれの純粹な普遍性を發揮することによつて之から脱却してゆくのである、こゝこそ科學的知識の特質があると私は考へる。

今日では更に科學の上に民族的差別の現れ得ることがチチス學者によつて主張せられてゐる。大きく見た上で民族によつてそれ／＼氣質の相違のあることは事實であるから、科學的思考に關しても多少とも異つた好惡を感ずることはあり得ると思はれる。併しそれにしてはそれ／＼の民族に對して之等を具體的に差別するのは甚だ困難であるし、また純粹な思考に關する數點などでは同一の階級に對する論理的な態度が必ずしも一つには限られないから、その間の

選擇が多少とも可能とされるけれども、自然科學ではその理論の當否はすべて客觀的に決定されねばならないから、單なる好惡によつて理論を善ふなど云ふことはできない。自然科學の理論が一義的に確定され得るかどうかについてはなほ議論の余地があるとしても、その適否はいつも實際的事實が之を決定するのであつて、民族的思想の差別によるとはいかにしても考へられない。だからチチス學者が物理學上の相對性理論や原子理論をニダヤ的であるとして排斥するのは、實際には科學的な何等の理由も存しないと云はねばならない。

要するに科學的知識は、かくてたとひ一時的には種々の社會的影響を受けようとも、結局はそれの論理性と普遍性によつて客觀的に形づくられてゆかねばならないものである(終)

一日一題



豫言の性格

右原 純

世間はいつもあらゆる豫言に満ち、人々はまたさまざまの豫言を待望してゐる。

明日はどんな運命が自分を襲ふであらうか。現在の自分の健康はどう續いてゆくか。生活はどうなるか。さう云へばこの頃は物質がむやみに騰つて日々の生計もいかに苦しくなるが、この先きと根柢を求めようとする。

豫言にはしかし種々の性格がある。ト古も一つの豫言であるが、古來のいはゆる「聖書」も八卦、當りぬも八卦」といふ蓋が既にその性格を明かにしてゐる。次には宗教的信念、若くはその他の熱情的信念による豫言があり得る。これは萬事を「たゞ」神秘的に解決し得るとする、いはゞ人間の弱い意力に基くものではあるが、いかに人間が望まうとも厳然な自然の法則を些かでも左右し得ないと云ふことを諒かに省るならば、そこに我々の面影を饒舌のやうに抑へるものに言ひであるわけにはゆかない。

直するとしても、極めて多くの要因を含む具體的現實に關しては容易に正確な求め難いのである。例へば百年後の日食を豫言することはできても、明日の天候を誤りなく豫言するのは既に甚だ困難である。更に一定の目的に設計された機械は大體において豫言通りに動くが、それすら不時の故障は免れないし、病氣に對する醫學的豫言さへさほど當てにならぬこともある。

だからまして人間の意識現象を含む社會的現實の如きに關して、單なる直情的な獨り合點な豫言が獨断的に叫ばれたとしても、少くとも今日に於てはそれの眞の性格について十分に周到な科學的検討がなされねばならないのである。

何かしらの不安が昂まるときに、豫言は殊に著しく流行する。併し不安があればある程、我々は一層これに對して慎重でなければならぬのであらう。

方法は異つてゐたとしても、原理的には何れも核の構造を變化するものでなくてはなりません。

水銀から黄金が生ずる際に原子核から飛び出すものは、プロトン即ち水素原子核であるか、又は之れの新結合したヘリウム原子核であるかは、尙ほ詳細の研究を要することに思はれます。ラヂウムなどの放射性物質の原子崩壊の場合にはいつもヘリウム原子核が跳はゆるアルファ線として、又電子がベータ線として出るのです。

水銀原子の人為的破壊が廣く最も重大な結果は、恐らく同性體(イソトープ)の研究と相俟つて、原子核の構造理論を明かにすることにあらうと、私は推察してゐます。

若しまた黄金の夢が人々の科學的好奇心を喚ぶならば、それを媒として自然科學の美事に近づくことも構でありませう。

たとすべての場合に誤謬を取り除くために、私はこゝに教言を費した次第です。(十月一日)

近頃では日本學術の
興衰を論じその他國
の學識で科學研究の
補助又は給與を行つて
ゐる。だがその實態
は何れもまことに微少
で、先づ無いよりはま
う。

しと云ふ程度である
世界各國に比べて何と
いふ間ないことであら
うか。五、五、三の軍
軍比率を算して不當で
あると發つてた我が
國が學術の上でだけは
甘んじてその末座に坐
してゐるだけだの金

科學奨勵の道

石原 純

つてなされねばならな
い。兎に一般の科學研
究者は毎年度の助成
費に補助申請をす
る。そのうちどこかで
採用されることになつ
たとしても、もとゝ
もに必要だけの金

困窮であるのは最初か
ら、それはこの上にな
い。要するに、
X
併しともかく少な
がらも研究費が行
はれるとするなら、之
は最も有効な方法によ
る。

このやうな結果は、
つまり少額の補助費を
あちこちにもこころを
配分なく振り撒くと
することから起る弊で
ある。それは公平に似
て、公平でもなく、ま
だせつかつの補助をひ
どく無意味にする。寧ろ
これを數に勝つて、之
等にだけせめて十分
の費用を配するに與へ
るという方法を採るべ
きではあるまいか。之
が研究奨勵を生かす最
善の道であるといふ私
の考へる。

困窮であるのは最初か
ら、それはこの上にな
い。要するに、
X
併しともかく少な
がらも研究費が行
はれるとするなら、之
は最も有効な方法によ
る。

※イギリスの科學雜誌
「ネイチャー」などを見る
と、大學や研究所やそ
の他の官
の公立
の機
の機
の機

か講師とか研究員とか
研究助手とかを公募す
る廣告が澤山載つてゐ
る。中には初任の待遇
はかりでなく、その地
位で年数を経ればどれ
ほど昇給出来るといふ
ことまで親切に明示し
たものもある。これ等が
わが國で同様な地位に
相応するものゝ待遇に
あはゆる機會に望まれ

比べてどうあつてふかと
いふことがよくある。わ
れはこれに興味がある
が、それよりもわが國
ではどうしてかういふ
ことが出来る行はれな
いのかと思つて、私は

いつも驚嘆とそれぞ
れを嘆息する。
科學研究のためには少
しでもすぐれた人々に
や關を寄せさせること
になる。

ねばならない。なるは
一旦その地位を得れ
ば、先づ大體は終年ま
では安定の保證がつけ
られたやうなものである。
その間に研究業績が
あらうが無からう
が、かくてそれがいつ
か子にならない。何もせ
ね方が却つて無難な位
だと、或る人は皮肉つ
てもゐた。こんな風で
はわが國の科學研究も
まことに心細い限りで
ある。何よりも研究を
重んじ、そして熱心な
研究者を擁護する道が
常に講ぜられなくては
は、わが科學界の前途
はまことに憂ふべきもの
がある。(眞實は石原純
七)

わが國で同様な地位に
相応するものゝ待遇に
あはゆる機會に望まれ

わが國の科學研究も
まことに心細い限りで
ある。何よりも研究を
重んじ、そして熱心な
研究者を擁護する道が
常に講ぜられなくては
は、わが科學界の前途
はまことに憂ふべきもの
がある。(眞實は石原純
七)

わが國で同様な地位に
相応するものゝ待遇に
あはゆる機會に望まれ

新短歌

石原純

一日一題

仙臺の大正時代
——と言つても
ずるぶん昔のこと
とになった、當
時は初代の小川
さんが議長で、
醫學部と理學部
しかなかった、
林鶴一博士とは
いふ仲間だったが、それもも
う故人となつてしまつた
仙臺は静かなところだ
つた、米ヶ袋の大正教授にも

思田がふかい、東北地方も日
本海岸の方は餘りよく知らな
い、秋田には一度行つたこと
があるが、

アララギも當時は彌生吉
君を中心として、藤大赤彦君
などが活躍してゐた、私は彌
生君とは大正時代に初めて
會つたが、彌生君は當時山形
縣まる出しのズーズー縣なの



石原純氏

で、さつぱり話を通しなくて
融つたものだつた、その後自
分はアララギを去つて、不定
形の新短歌をはじめたが、そ
れは定形短歌のマンネリズム
（註：立像）でも、地方からち

よい／＼新顔が出るが、結局
はその中の數人が常連として
固定してしまふのは残念だ、
新短歌は傳統的な形式に縛ら
れぬから定形短歌では歌へな
かつたものが、自由に、いき
いきと歌へる、つまり定形短
歌がマンネリズムに陥つたの
は、一つにはあの形式のせい
だ、それを打破つて、清新な
よい感覺の閃いた新しい歌が
日本の各地方からどん／＼現
れて來てほしい、ことに東北
地方などは、東北民らしい生
活の中から、何か新しいもの
が出てほしいと思つてゐる。
（筆者は元東北帝大教授理
學博士）

物質の粒子性と波動性

石 原 純

近頃の物理学上の量子論では、物質を構成する微粒的要素として陽子や中性子や電子などは粒子性をもつと同時に波動性をもつと云はれてゐる。光を構成する要素としての光子もまた同様である。かやうにして同一の對象が外見上全く異つた兩様の性質をもつと云ふことは、以前には矛盾と見られてゐたのであるが、量子論の立場から云へば、それは矛盾ではなくて却て互に補足するのである。それでこれを補足性（又は相補性）と唱へてゐる。

量子論は主として粒子性と波動性との矛盾をいかにして解消せしむべきかと云ふ問題の解決を探索することによつて發展して來たのであつた。最初はこの事がいかに困難と考へられたかと云ふことは次の事情を想描して見ればわかるであらう。

光は反射や屈折や、干渉、回折などの現象によつて明らかに波動であると思はれてゐたのに、光の放射の法則の發見以來、エネルギー量子の存在が確められ、しかも

この量子は空間的にも粒子のやうに或る微小な範圍に局限せられてゐると解しなければならぬ性質の事實が示されるやうになつた。

だが、この事はその波動性とは明らかに兩立しない。なぜなら、波動は空間的に限りなく廣がつてゆくのがその當然な性質であるのに、事實は粒子のやうに空間範圍を局限するからである。

疑はれが解かれる以前にはいかに不思議に見えるけれども、結局それは人間の思考がまだ足りないからであつて、どこかにその抜け道があるのである。自然は立派にその道を通つて、最初からこの謎を解いてゐるわけである。

同じやうな矛盾に我々は既に幾度も遭遇したのであつた。氣體の運動學的理論で我々が熱の現象を理解しようとしたときに氣體の個々の分子は力學的法則に従つてすべて可逆的な運動を行つてゐるのに拘らず、之等の分子の多數を統計的に取り扱つた場合に、分子の運動エネルギーの平均としての熱はもはや可逆的な變化を示さない。こゝでは可逆的な過程の全體が何故に

非可逆になるかといふことが一つの謎であつたが、之はボルツマンによつてエントロピーなる概念の統計的意味が闡明せられて、解決の道を見出した。この場合に分子の可逆的な過程は所謂微視的現象であり、之に反してエントロピーの非可逆性は巨視的現象に屬するのである。

光の場合に於ても反射や屈折や特に一様な媒質内での直線的進行の如きは、すべて光線を考へることによつて簡単に説明せられてゐるが、干渉や回折現象に至つては波動として解する必要がある。

波動の性質は光線の直線的進行と矛盾するかの如く見られたことがあつた。併し前者は波長と同程度の範圍に於て現れ、後者はそれよりも遙に大きい範圍での現象に外ならない點で、同様にそれ／＼微視的及び巨視的であるといふやうである。

もう一つの例を挙げれば、力學で太陽のまはりの地球の軌道を論ずる際には、太陽や地球を質點として見做しても差支へないといふことは、太陽や地球の直徑に比べて非常に大きな範圍を取り扱つてゐるからである。之は謂はゞ巨視的な見方に屬するのであつて、之に反して地球自身の有様を考へる

のは微視的と見てよいであらう。光の粒子性と波動性とをそれぞれこの意味での微視的及び巨視的性質として解しようとしたのが、即ちシュレーディンガーの波動方程式なのである。そこでは物質粒子に對しても同様にこの兩様の性質を興へることによつて、一般の量子現象を解くことができたのである。

簡単に云へば、補足性といふのは見方の相違によつて互ひに矛盾すると思はれる性質が實は矛盾なしに補足的に同一の對象に歸屬せられてゐるといふことであつて、我々が種々の見方をもつて之に對する場合にそれ／＼それ／＼の性質が別々に現はれて來るのであるから、この對象の眞相は即ちそれらをすべて補足したものでなければならぬのである。

このやうな一般的な意味で補足性といふことは單に物理學上の對象に對してのみでなく、種々の場合に現はれることは容易に知られるであらう。

例へば人間を肉體に見れば、それは物質の特殊な結合體であるといふことを肯定するわけにゆかない。現在の生理學や醫學では、主としてそこに行はれる物理學的及び生物化學的現象を研究してゐる。他方で併し人間を心理的に見れば、それは一つの精神活動體である。そこには或る心理的法則は

行はれるにしても、我々は少なくとも主觀的に自由意志なるものを肯定する。この自由意志の存在、他律的な肉體現象とがいかにして兩立し得るか、今日固より全く解決されてゐない。しかも從來その間に何かの矛盾が存在するやうに考へて、靈魂や靈魂とか生氣とか稱するものが織き入れられて來たのであるが、併し今は之等の兩者の現れを補足性として見做す一つの道が我々の前に展かれてゐるのを見逃がしてはならないであらう。

補足性のもう一つの例は、社會國家若くは民族の一體としての個人と、私的の面における個人との間に見出たことが出来るであらう。舊時代の自由主義や民主主義に於ては後者が重視せられ、今日の社會主義や全體主義に於ては前者が重視せられてゐる。このやうな歴史的推移は諸個人人間の間に於ける生存競争が個人人間に行はれるか、又は特殊な種々の團體の間に於けるかによつて起るのであると考へられるが、要するに同一の個人に對するそれらの關係は、互に補足すべきではなくして、却て互に補足すべきものでな

ければならぬであらう。補足性なる概念は種々の事物を正しく解するために必要であり且つ有効であると思はれるが、こゝではこれの簡單な説明に止めるより外はないので、それ以上は讀者の考察に任せる。

大學自治問題の根源

右原純

根本文相によつて提議され帝大
の憲法問題に關して大學自治
の意味が既に多くの人々によつて
論議されてゐるが、私の見るかぎ
りでは、それらの論議の殆どすべ
ては、たとへ現在の大學の實情に
ついて種々の不満がその中に含ま
れてゐるとは云へ、少くとも大學
の本質としての自治制度を承認し
てゐると見てよいのであつて、こ
の事は既に十分に文部省の反省を
促すに足るものではないであら
うか。それは即ち衆議の一致する
處と見られるのであるが、若しそ
れにも拘らず、徒らに権威をもつ
て之等の衆議を壓抑しようとする
ならば、これに一種の暗黒政治の
結まる危険があることさへ懸はれ
る。さき時、貴院の三四の諸公
がこの問題について長興東京帝大
校長と會見されたと傳へられてゐ
るが、その會見内容を我々が審か
にすることの出来ないのは遺憾で
ある。更に漏れ聞く所によれば
自治とか憲法とか云ふことそれ自
身に或る危険思想が含まれてゐる
といふやうな議論がいはゆる愛國
團體に於て頻に行はれてゐるさう
であるが、若し之を正しいとするな

ら、議會制度乃至は市町村自治の
如き憲法問題に關するならばなら
ない筈である。併しそれがいつも憲
法的に論議されないで、何かしら
陰謀の如く動いて直接に權力の變
動と結びつかうとする處に不可思
議な陰謀な毒氣が醸成されてゐ
るのである。

大學問題の根源もまた實にこ
こにあると推測せられるのである
つて、之を擯いて徒らに未だ精
な議論を繰返したところで、結
局は無益なのである。今日の時
代には獨權によつて支持せられ
た獨裁的政治を行ふ國家が諸國
に出現してゐるにその威力を振
ふかの如き點を論じてゐるので
その影響がおのづから我が國に
も及んで、このやうな事情を産
生するのではないかと考へられ
る。併し之等の國家に於てはそ
れぞれに固有な特殊な理由の存
在によつて止むを得ずやうな
獨裁政治が成立したのであつて
それは或る場合には彼等にとつ
てさへ必ずしも幸福な状態と
は斷言されなかつたのであら
う。我が國にあつては明らかに
それらと全く事情を異にし、現
に依然として議會制度が政治の
基本となつてゐる。その限りに
於ていかなる政治的行動もすべ
て公論の上に決せられなければ
ならない筈である。

大學問題に關する場合には、總
長の選舉は官定規定に反するとい
ふことが改革の主要な理由として
擧げられてゐる。之に對しては選
舉は内閣府の選舉の一方に過ぎな
いといふ様な聲明も多く見えてゐ
るが、問題をもつと根本の點に觸
れたはつてゐる。即ち教育府とし
て研究に最も重きを置くべき大學
を二役官制と明確に差別する認識
を必要とするといふことである。

この認識を欠いた枝葉の議論は同
じくすべて無益であるといふ思
ふ。田邊元博士は、之に對照して
「國家と學問」と題して「教育」
九月號の誌上で、最も眞實に學問
の自體性を説かれた。私はこゝで
その點を擧げ直す必要はないと考
へるが、特に同博士が最後に於て
「學問を動かすことのある種々の
政策に迫れるやうな理論を一
みづから國家の爲の學問といふ名
目の下に濫用する」ところの學
者、直に以て國家に有用なる學
者であること、却て學問の自
主的な立場を通じて眞に國家に
貢獻せんとする學者を、その批判
的態度の故に自己の意のままにな

らざるものとして斷んじつけよう
とすること。これが學者に對する
の態度を簡明に大學の人事を一切
官廳の手に收めなければならぬと
考へる場合の主動機ではないであ
らうか」と述べ、「果して然らば
國家と學問との眞實關係に對する
理解の欠如は、國家の爲に思は
らんとする學問を毀切つて、實は
國家を無知に委ね、空論に陥れる
結果に導くといはねばなるまい」と
論ぜられたのは、人々が煩雜す
べき點であると思ふ。かくて「そ
れが、自ら權限に近づかん」と欲
する學者の爲に課せられた結果であ
るならば、警戒すべきは、求めて爲
政者に接近しようとする偽學者で
なければならぬ」と指摘されるに
至つて、まさに事件の背後に隠さ
れた病患の中枢を衝く鋭利な言で
なければならぬ。

官吏制度の形式論に至つて
は、本來我が國の官吏制度がそ
のなかに大學教授の如き特殊な
職務を有するものを含頭に置いて
てつくりだされてゐないといふこと
を意味するに過ぎない。さき
に、技術官廳の長官として技術
者を任用することの出来ない現
時の制度に對して、文官任用令
改革の議が起つたことは、なほ
我々の記憶に新たであることに反
して、今は大學教授を無理にも
現行の官吏規定で律しようとする
のは、明らかに政策上の矛盾
、乃至は制衡の歪曲を暴露
するものでなければならぬ。
大學は何故にその本質に適應
する制度規定を待つて律し得ら

れないのであるか。若し現在に
於てそれを缺くならば、何故に
制度上の改革をこそ提議しない
のであるか。

更に根本文相は、帝大總長が多
く自然科學者であつて、之等に行
政手腕を期待し得ないことを遺憾
で述べたと傳へられてゐるが、事
實上の報告は全く違ひで、之は實
に大學に對すると共にその總長の
任務に對しても盲目無識である
のを示す驚くべき言である。大
學が行政官廳でないと同時に、總
長は決して行政長官ではない。大
學の諸般の事務の端々は別に事務
官を設けて之に任せれば足りるの
であつて、總長は遙にそれ以上の
重大な任務をもつべきである。な
ぜなら、それは總長府の長として
あると共に、研究機關の長として
自らその權威たり得る人物でな
ければならぬからである。恰も軍
部に於て大臣は行政事務に參與す
るが、參謀總長はあらゆる軍事を
統べるものとしてそれ以上遙に重
要な職務を有しなければならぬ
のと同様である。

西洋に於ては、總長の就任に際
して必ず自己の専門に關する
學術的内容をもつた就任演説を
行ふのを例としてゐる處が多
い。教授の轉任に際しても同様
である。そして之等の演説のな

かには學問に關する一世の名論
卓説として長く後代に傳へられ
てゐるものさへも少なくはない
かくして始めて大學は之等の
總長を教授並に偉大なことに對
して共に對目し尊敬し、互ひ
に協力し努力して學府の名譽を舉
げることになり得るであらうか。
これはいかにいふまでも然らず
き美國ではなからうか。我が
國にはかやうな事が行なはれ
てゐないのは遺憾であるが、少
なくとも眞實に總長を教授を
自分の大學に迎へるにこの心
情は、常に之と同一のものでな
なければならぬ筈である。

さて故山總長が總長選舉を排
して内閣府の事務に依らざるやう
に改められたのも、蓋しその眞意
はこの點に關ふものに外ならな
いと思ふべきであり、そして當時
この内閣府が容易に承認され
たといふのも、蓋し山總長な
どの之に對する熱烈な説明によつ
たのであらうと思はれる。之等の
事情が今は全く隠れてしまつ
て、大學に對する現時の政府の政
策が露くあらはれてゐるのである
とするならば、問題は再び根本に
溯つて、大學をいかにして時々の
政府の政策から超然せしめ得るか
といふ方法の論議に導かれなけれ
ばならない。なぜなら、政策は個
人の政府と運命を共にしても支
ないが、之に反して大學は國家と
共に永遠な存在であるべきことを
我々は確信するからである。



帝大問題に就て

石原純

◆…大隈内閣も文相省
と東京帝大との間に愛
国か、大隈の危微が解へ
られながら、それでも
大隈の晩年に對しては
と云はれるのは、時局

ができ火と稱してゐる。これで見ると前者は事ら形式を重へることと主眼とし、後者は買ひを伴つことに重きを置いてやうである。◆さてここで我々が

良い買ひに適合するやうにつくられてゆかねばならない。併し人間は一旦形式を形づくと、とかく之に固執しなければ氣がまわらなくなる。茲に所望の像は

概略に結構な次第である。その結果について「助」が過つたと云ひ、帝大陣は眞實に從來の誓いを守ること

考へねばならないのは
形式と實質との関係で
ある。人間社會を秩序
立てるためには形式が
必要であるが、より大
切なのは實質の改善で
ある。形式は形により

自ら形式を執り服すこ
とに一種の能力を要
し、こゝにやゝもすれ
ば規則一服の弊を生
ずる。

◆之に關聯して私
は、西洋リシヤ時代の

形而上學が常に「理想」
 形式の「理想」を定立して
 したとを想ひ起さな
 わけにゆかない。そこ
 には恐らく多くの「思
 惟の正」が「誤」され
 たかも知れないが、何
 等の「利」をも「得」むこ
 はできなかつた。近代
 の「實利主義」はこの弊
 を知つたのである。政
 治に於ても「事情」はほと
 同様にである。偉大なる
 政治家はあらゆる形式
 を「利用」する「實利主義」
 に對するものでなけれ
 はならない。

「キユリー夫人傳」

エーヴ・キユリー著

石原 純

東日書推 倶楽部

あらゆる壓迫のもとに奮然と立ち上つてゐる。その國ボテランドの「重苦しい風土」のなかにキユリー夫人は少女として育つた。そして早くから「生きる」といふことに、彼女自身の心には、すでにその國の祖國愛の熱情と毅然とした反抗心が深く明えてゐたといふ。かくて「數々の夢を描いた貧乏生マリヤ・スクロドフスカ」として遠くバリの學窓において多くの生活上の困苦に耐へ、遂にその夢のなから

「學問への憧憬」を拾ひ出して、初めて輝かしい曙光をそこに見出したことができたのであつた。次いで彼女はピエール・キユリー夫人として偉大な科學上の發見に成功したが、間もなく愛する良人の不慮の死に遭遇し、その後を繼いで教授の重擔につくに至つては、その名譽を振む人たるによつて、或る勇猛な運動が展開され、「狂暴な突進のやうに、邪な心が彼女に襲ひかゝつた」といふことである。まことに人生は多難であるといはなくてはなるまい。たゞキユリー夫人の一生にとつてのこの上もない點は、その晩年における平和の生活のなかに熱心に藝術的研究を續けながら、傍ら二人

の子女を立派に育て上げることができたこと、その科學的業績を通じて廣く人類への福祉を待ち來し得たこと、重ひに祖國のその後の好ましい回復を見たことであつたであらう。

本書がこの「キユリー夫人」の最も眞實な姿をもの證つてゐるのは、いふまでもあるまい。それは彼女にとつて最も近親な「作家」の最も注意深い筆に成つたものであるからである。「神話にも似たこの物語に些少でも修飾を加へたならば私は罪を犯したことになるだらう。私は自分に確かなでないものは、唯一つの逸話と雖も證らなかつたと、この著者は述べてゐる。そしてなくさんの書簡や日記やその他の文書を引用して、ひたすら事實を綴ることによつてゐる。ここにこの書の絶頂の價值があり、また我々にとつての最大の興味がある。

著者はまた到るところで夫人の「異常な純真さ」を我々に示してゐる。「私が生れたのは母が三十七歳の時であつた。私が母の人物を識り得るはとに成人したとき、かの女は有名な老婦人になつてゐた。しかしその死の瞬間に至るまで「凡そ有名な人たる術を心得なかつた人であり、優しい、一徹で、しかも小心な一女性に過ぎなかつた」と著者はいつてゐる。それはどかの女は人間としての親しみに充ちてゐたのである。

本書の邦譯文も概して無難で、すらくと讀み易く出來てゐるのには驚く。外國でも諸國語に翻譯されて極めて廣く讀まれてゐるさうであるが、これはわが國でもぜひとも廣く讀まれて欲しいものである。特に女性の間に、これによつて人間として最も高く生きる心を勵まし、更に眞實な「學問への憧憬」を喚び起させることができたとすれば、實にこの上もない偉大である。【譯者川口篤・河盛好藏・杉捷夫・本田實代治四氏】（一圓八十錢）神田駿河台 白水社

◆：現時世界の物理學界の興味は原子核の研究にあると云つてよいであらうが、その内容の甚だに複雑であることより、



◆：現時世界の物理學界の興味は原子核の研究にあると云つてよいであらうが、その内容の甚だに複雑であることより、

を導き上り、この原子核の構造を研究した海川の理論が新たに極めて有意味な理論を提示せしめるものとなるに違ひない。

學界の獨自性

石原 純

られるのは、我が大國の一大光榮であらう。然るに、大國の光榮は、大國の獨自性にある。獨自性とは、獨自の思想、獨自の行動、獨自の責任を意味する。獨自性なくしては、大國としての責任を負ふことが出来ない。

に對すべきである。だが、由來我が國の學者の獨自性は、先づ外國に於て實現されることによつてのみ認められるのである。之は科學の獨自性として止むを得ないことではあつたが、我々はいつまでもこの獨自性を堅持すべきではない。おそそ科學の上に於ては、獨自性は科學の生命であるが、だからと云つて科學の獨自性を堅持するべきである。獨自性は、科學の生命であるが、だからと云つて科學の獨自性を堅持するべきである。

◆：之は我が國の獨自性を見たいではないか、或る漁師が海に釣人魚の體が某氏の體で被せられてゐる、その體に「この體は我が國の獨自性である」と刻まれている。



◆：之は我が國の獨自性を見たいではないか、或る漁師が海に釣人魚の體が某氏の體で被せられてゐる、その體に「この體は我が國の獨自性である」と刻まれている。

といふ意味の説明が記してある。獨自性とは、獨自の思想、獨自の行動、獨自の責任を意味する。獨自性なくしては、大國としての責任を負ふことが出来ない。

科學的教養

石原 純

◆：ところで若しこの獨自性を西洋で認められたものではなく、我國で既に二千年の昔に、神武天皇即位の際、神武天皇が釣人魚の體が某氏の體で被せられてゐる、その體に「この體は我が國の獨自性である」と刻まれている。

獨自性とは、獨自の思想、獨自の行動、獨自の責任を意味する。獨自性なくしては、大國としての責任を負ふことが出来ない。獨自性は、科學の生命であるが、だからと云つて科學の獨自性を堅持するべきである。

先生の口を
 とし
 た
 先生の口を
 とし
 た